パネルディスカッションの概要

（１）登壇者

●コーディネーター

熊本大学　熊本創生推進機構・教授／地域連携部門長　金岡　省吾　氏（富山大学名誉教授）

●パネラー

かみきた地域むらづくり協議会　事務局長　椿　一雅　氏（新潟県見附市）

釜ヶ渕みらい協議会　地域資源開発部会 部長　坂口　創作　氏（富山県立山町）

鉈打ふるさとづくり協議会　事務局長　村田　正明　氏（石川県七尾市）

※各地域の自己紹介は配布資料のとおり

●アドバイザー

金沢大学能登里山里海 SDGs 研究部門　特任助教　淑瑠　ラフマン　氏

（２）テーマ１：取組のきっかけ、機運醸成の方法

（かみきた：椿事務局長）

・過疎化の問題は自ら気付きづらい。気付いたときは手遅れのこともある。外部の目が重要。

・会社化し農業を行っているが若い農業者が不在だと認識している。そこから地域の将来に不安を持ち、地域をなんとかしたいという使命感でこの事業に取り組んでいる。

（釜ヶ渕：坂口部長）

・農業を営んでいる人は後期高齢者がほとんど。地域の田畑をどう守るのかが不安。

・富山市に近接しており、若者が流出している。一方で大きな観光資源・農的資源も存在。

・危機感＋この地域の可能性でいろいろなことができるという思いから取組をスタート。

（鉈打：村田事務局長）

・ 平成の合併による保育園問題や地域の限界集落化が明らかになり、地域の将来のための議論がスタートした。

・地域活性化には農業しかない。おいしい米をつかった活性化，人口減に即した圃場整備をすすめるための地域の話合いを推進。

・増加する高齢者にとっても安心して暮らせる地域にするため、保育園をリノベーションした地域運営老人ホームを設立，買い物支援を実施。

（金沢大学：淑瑠特任助教）

・若者、よそ者、ばか者をどうやってつなぐか。

・１つの分野にこだわらず総合的な課題解決が地域にとって必要。そのためには多様な人、世代が交流する場があれば。

（３）テーマ２：農村 RMO 形成や運営を進める上での悩み事とその解決策

（かみきた：椿事務局長）

・次世代リーダーの育成には、リーダーとなる本人の自覚が必要。

・従来は強いリーダー＝顔役という位置づけであったが、現在なりの資質＝変化が必要だと思う地域の中で語り合うことが重要。おしつけでなく，内発的にリーダーになる人の意識が変化す

ることを目指す。
・サービス提供に対する対価の考え方が基本だが生活支援型はもうからない。運営資金として補助金の活用はやはり必要。
・農村で地域が存続するために，①人が少なくなっても成立　②人を呼び込むの２タイプがある。
（釜ヶ渕：坂口部長）
・移住者や若者をどうやって取り込むのかは大事。移住者側としてもメディアを活用し、顔を売ったり，コミュニティ活動に参加し頑張る姿を見せたりすることは重要だと思う。
・移住者と地域の方々の違いがあるのは当然で、ここをあえてまとめず共存するシステムが必要。コミュニティづくり、ビジネスに思いやアイデアを生かす。
（鉈打：村田事務局長）
・地域で話し合いを行う際は、50 歳以上と 50 歳未満の２グループをつくり議論してもらっているが、その中でリーダーが顕在化してくる。
・前回ビジョン策定から 10 年がたち、新たなリーダーを模索，新しいビジョンづくりを進めている。10 年後に何が残るのかを考えた議論を展開。ここに農村ＲＭＯ事業を活用。
・補助を受けながら取組を進めることで、事業が自立し始める。
・鉈打は移住者への違和感がない地域であり自然とグループに入り込んでくる方が多い。祭り、懇親は若い衆で！ということを言っている。
・新規就農を目指す方には、「農機具買うな！」、「耕作地はある！」と言っている。どちらもお貸しすることができる。農家としての自立支援も行っている。
（金沢大学：淑瑠特任助教）
・人×お金×知識と金融機関が連携し、行政が支援すると様々な方が参加し始める。
・マイスタープログラム修了生の中には海外の裕福な方と連携している方もいる。自分の考える Policy が人のつながりをつくっていく。
・面白い課題は人がつながるきっかけになる。

（４）総括
（金岡教授）
・３０～４０歳代の事業承継する若者が活躍。
・かっこいい大人とは地域課題に立ち向かう大人。地域課題を解決する農林漁業者やシェフ･･･。地域課題はピンチではなくチャンスだ。
・大学生、高校生の意識が変化して「地方で活躍するのは格好いい！」と思う若者もいる。一度、外にでていくが，地方に戻り、地元に絡む仕事したいと思う若者も増えている。
・まずは１歩踏み出すことが大切。
・農村 RMO なに？からスタート。絶対成功しなければいけないこともない。実験として捉えることも。
・悪い点もいい点も本音で話せる地域づくりを。